

自己評価報告書(最終報告)

報告者

現代教育課題総合コース/
金野 誠志

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

教育大学の一員として、つねに教育実践を視野に入れ精励したいと考えている。

①理論と実践の関係性を常に自覚した授業内容とする。

・専門とする学問研究分野へのあくなき探究と同時に、一方でそれを相対化し、他のさまざまな分野と積極的にかかわることの意義が実感できるようにする。

②教育内容としての知識群と学習者の視点の涵養にも十分に目配りした実践力の必要性を体験的に理解できる授業方法とする。

・<指導する/される>という一方的、固定的な関係ではなく、双方が学びあう応答関係を重視する。また、学部学生、現職教員、ストレート院生のそれぞれのニーズに応じる。

③授業への参加度、レポート等により評価し、評価規準を受講者と確認する。

・自分と異なるものの見方や考え方をする他者の思考とを効果的に対照させる力を重視する。

2. 点検・評価

①「人間とコミュニケーションⅡ」・「人間とコミュニケーションⅢ」については、発達心理学、教育思想史、教科教育論等の知見を踏まえつつ異なる立場から行われている学校での具体的な実践事例を紹介し、その分析・考察を行った。学校教育の中でのコミュニケーションの意義について学生は理論と実践の関係性について押さえることができた。と考える。「コミュニケーションと環境」については、ESDの考え方を基本に、多様な教科・領域での環境教育に関する実践事例、資料や教材の分析・検討を行った。未来世代のニーズを視野に入れた開発という視点を学生は得ることができた。と考える。「生活科教育論」では、学習指導要領に示されている目標や内容を踏まえ、実践事例分析や教科書分析を多く取り入れた。また、社会に関する内容よりも自然に関する内容について、学生の学習経験が少ないという実態を掴んだため、それに対応する授業を行ったことにより学生の視野を広げることができた。と考える。

②大学院では毎時間、講義の節目でワークショップ型の対話重視の授業をおこなった。講義内容を踏まえながらも、学生が多様な考えを互いに出し合いつつ、よりよい考えを探究していくという積極的な授業の展開ができた。学部では、一方的な講義になることのないよう、学生2~3人、5~6人といった小グループでの対話を毎時間取り入れて、学生の積極的な授業への参加を促した。170名という多数の受講者での授業ということもあり、学生の学び合う応答関係の深さに差があったのも事実なので、その点は次年度の課題としたい。

③成績評価は、評価の観点や評価規準を明確にして学生と共有した。特に、大学院提出されたレポートは全て添削し、論の展開の善し悪し、別の視点からの考え等を具体的に示したため、その点がとてもよかったという声が学生から聞かれた。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

1. オフィスアワーを限定せず、必要に応じて学生とのコミュニケーションがとれるようにする。
2. 授業やそれに関することはもとより、教員採用試験や教師として必要な実践力について、現職経験をもとにしたアドバイスする。
3. 学生の自主的な学習活動の機会や場を支援し、情報提供等ニーズに応じたドバイスをする。

2. 点検・評価

1. オフィスアワーにこだわらず、「学生が必要なとき」「必要なだけ」「必要なこと」について指導を求められることができる環境を作っていたことにより、M1の修論テーマや方向性の決定が滞りなくできた。また、担当する授業だけでなく担当外の授業の相談にも学生が訪れたりするようになった。
2. 小学校に長く勤務していた経験を生かして、コース内の学生に対して、授業実践や教育実習、教員採用試験への対応に関する指導を行い学生からも好評であった。
3. 就職委員ではなかったが、教採実技ガイダンスの面接指導や模擬授業の指導に積極的に参加し、学生の疑問の解消や要望に応えることに貢献できた。ゼミ所属の学生に対しては、図書館の利用の仕方、論文検索の仕方、推奨図書を紹介、日々の時間の使い方や長期休業中の過ごし方等、研究に関する初歩的なことから生活面に至るまで支援し、反応もよかった。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

1. コミュニケーション教育を新たな研究分野に加えたため、これに資する学会に入り研究基盤が確立できるよう研鑽に励む。
2. これまでの教育実践と研究に基づく「マス・コミュニケーションと教育」に関する論文を書き投稿する。

2. 点検・評価

1. 小学校勤務から本学の勤務へと変わった初年度であったが、日本道徳教育学会、日本道徳性発達実践学会、日本国際理解教育学会、日本グローバル教育学会に参加し、来年度の研究の方向性として「自己認識」「地球市民」「愛国心」「伝統・文化」「コミュニケーション」等の関係性について吟味していくという方向性を見出すことができた。
2. 全国地理教育学会学会誌『地理教育研究』第14号に、旅行という場面を設定した意見交換の場を設け、国土の位置、地形や気候の概要についての事実に基づいた知識を形成しながら、子どもが当事者として物語を紡いでいく学習の有効性を主張した論文「国土空間認知に関する教材論的一考察」を投稿し、掲載が決まった。国土空間認知に関する新しい視点、指導法を提起したということで高い評価を得た。NIEに関する「マス・コミュニケーションと教育」についての論文を投稿し、従来からあった記者や新聞社の意図について読み解く実践に対して、原理的な考察を通して習得させるべきキーワードを明確化した点で高い評価を得たが、修正意見を受け修正後再審査を受けることとなった。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

・所属委員会等に出席し、諸先輩方の指導を仰ぎつつ職務を確実に遂行していく。

2. 点検・評価

・教職実践演習実行委員会に参加し職務を果たした。
・就職委員会、免許状更新講習実施委員会に代理出席し職務を果たした。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

1. 教育支援アドバイザー制度に基づく講師依頼や教育関係機関から講師依頼のがあった場合は、本務に支障がない限り応じる。
2. 附属学校や地域社会の教育支援に、ニーズに応じて積極的に参加する。

2. 点検・評価

1.
・教育支援アドバイザー制度に登録したが講師依頼はなかった。阿波市小学校社会部(3年生)授業研究での指導助言の他、徳島県小学校社会科を語る会と連携した実践研究を行った。
2.
・附属小学校に5回、附属中学校及び附属特別支援学校には2回、附属幼稚園には1回赴き、研究の内容や附属学校の役割について共通理解を図った。特に教育実習に臨む学生指導の必要性について協議し、学生指導に生かすことができた。
・附属小学校の研究発表会、合同研究会(道徳)では、共同研究者ではなかったが参加、指導・助言を求められ、今年度の研究の反省と次年度の方向性について、附属小の教員・共同研究者とともに検討した。
・平成27年度版小学校道徳副読本編集委員会、小学校道徳デジタル教科書検討委員会の委員として昨年末から活動を開始した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)